

# うま獣医のよもやま話 ①6 園田 要 獣医師

## 馬の目の病気について



園田 要 鹿児島県出身  
昭和59年 麻布大学卒業  
同年4月 静内診療所勤務  
平成2年1月より 門別診療所勤務  
現在に至る  
診療事業部 部長

新年明けましておめでとうございます。組合員の皆様におかれましては、新しい年の始まりを和やかにお過ごしのことと、お慶び申し上げます。

馬は競馬場に入厩する時の検査で、片方でも失明があると競走馬になれません。また、セリでも白内障、黒内障、緑内障、月盲などの目の異常があったら、事前に公表しないと売買契約解除の対象となります。今回は馬の目の病気についてお話したいと思います。

先ず馬の目の模式図を示します。目の病気の説明の参考にして下さい。病名の由来ですが、白内障（白そこひ）は外から目を覗いて白く濁って見え、緑内障（青そこひ）は青く見え、黒内障（黒そこひ）は黒く見え、月盲は周期的に症状を繰り返すことが病名の由来です。

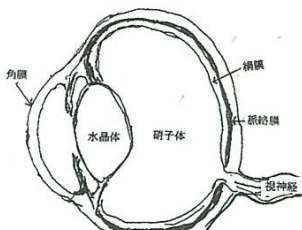


図1 馬の眼球断面模式図



写真1 白内障

白内障とは、水晶体（レンズ）は本来透明であるのに、蛋白質の変性により白く濁った状態となり、視覚障害を起こします。重度のものは失明します。先天性のものと、後天性があります。当歳時に発見するものは先天性が多く、薄暮時に目が白く光って見え、挙動不審です。後天性のものは、創傷性角膜炎からの併発や、後で述べる月盲の進行したときになることもあります。

ヒトでは人工レンズ装着手術が簡単に出来ますが、馬では残念ながら行なわれていません。

緑内障はかつてはブドウ膜炎により眼内圧が上昇し、瞳孔散大、眼球突出し失明に至るとされていましたが、今は網膜神経節細胞が死滅する進行性の病気とされています。馬では症例は少ないです。

※ 現在は国内外で馬の白内障に対する手術が実施されています。



写真3 緑内障（瞳孔散大）



写真3 緑内障（眼球突出）

黒内障は一見外見的には異常が無いように見えますが、網膜、視神経などの眼底疾患の総称です。眼底カメラや検眼鏡での検査で診断しますが、予後は悪く失明します。

月盲とは別名馬回帰性ブドウ膜炎ともいい、主にレプトスピラ という細菌に感染し発症するといわれています。治療して症状が良化しても、再発を繰り返し、白内障などを併発し予後は良くありません。



写真4 角膜炎

角膜炎は最も多く経験する眼疾患のひとつですが、最初の適切な治療を誤ると、短期間に症状が重篤化し、最悪の場合は失明に至ることもあります。馬がまぶたを閉じて、涙を出していたら、自己判断で以前獣医さんから貰った、目薬をさす前に、必ず獣医師を呼んで診断して貰ってください。目の病気によっては使ってはいけない薬もあります。目の治療は局所療法が多く、一日何回も点眼しなければなりません。そこで、写真のように持続的に自動点眼する方法もあり、良好な治療成績を上げています。

目の病気の診断には、従来肉眼で覗いたり、散瞳剤を使い瞳孔を拡大させ、検眼鏡や眼底カメラで原因を調べていました。ただ発病時には、瞼をしっかり閉じて



写真5 持続点眼装置

いたり、角膜などが濁っていたりして、水晶体や硝子体、網膜をみる事が出来ませんでした。最近エコーカメラで瞼の上からの超音波画像でも、角膜、水晶体、硝子体、

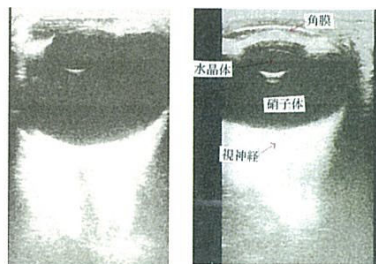


写真6 正常眼のエコー像 写真7 角膜炎のエコー像

網膜の異常を診断できます。角膜表面からだとさらに画像が鮮明となり、診断しやすいです。





